

## 体育科の学習内容に対する認識の曖昧さの実態

### －「運動種目を教える」と「運動種目を使って教える」－

The State of Ambiguity in the Understanding of the Learning Content of Physical Education  
: *Teaching a Physical Exercise and Teaching by Using a Physical Exercise*

野津 一浩<sup>1</sup>

Kazuhiro NOZU

（平成30年11月16日受理）

#### ABSTRACT

The first aim of this study was to organize information on the current state of the insufficiency of the pursuance of learning content by getting involved in the physical education lesson practice at elementary schools. In terms of the outcome and challenges regarding the current Curriculum Guidelines for the elementary school physical education, it was confirmed that the lessons are not being reviewed from the viewpoint of “what is to be taught.” In addition, as a result of surveying the research content of studies on the physical education lesson practice at schools, it was found that most of them were researches on instruction methods and no study included the viewpoint of pursuing the learning content.

The next aim of this study was to grasp the state of the elementary school teachers’ ideas (understanding) of the learning content of physical education. It was suggested that the teachers may be setting the learning content based on the idea of “how to teach a physical exercise.”

Furthermore, the ideas on the learning content of physical education were organized and lesson structures were experimentally examined based on the standpoint to learn the mechanisms and structures of the immanent exercises of the physical exercises. By presenting the organized ideas and such lesson structures to elementary school teachers and exploring how they were embraced by the teachers through discussions, attempts were made to identify the challenges concerning the pursuance of learning content. It was suggested that there is a need to change the mindset concerning the pursuance of learning content from teach a physical exercise to what to teach using a physical exercise.

#### 1. はじめに

平成29年7月に新たな時代に対応するための学習指導要領が告示された。体育科においては、「見方・考え方」を働かせる学習過程を工夫することにより、生涯にわたって心身の健康を

---

<sup>1</sup> 保健体育教育系列

保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指すものとしている。このことの実現に向けて、運動領域においては、発達の段階のまとまりを考慮するとともに、基本的な動きや技能を身に付け、運動を豊かに実践していくための基礎を培う観点から、発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図ったとし、各学校においては、育成を目指す資質・能力の系統を踏まえ、「何を教えるのか」とともに「どのように指導するのか」を整理し、学習を進めることが求められている。

「何を教えるのか」は、子どもたちに何を学ばせるのかという学習内容と捉えることができよう。単元で扱おうとする運動種目において適切な学習内容を取り出し、それを「どのように指導するのか」ということの整理が求められている。しかしながら、これまでの体育の授業実践において、何を学ばせるのかという学習内容についての追究が十分なされてきたかというところとも言えないのが実状であろう。岡野ら（2018）は、体育において、特に「対象」の喪失については、「活動あって学習なし（学習内容の不在）」、「学習者の意欲を喚起する授業（行き過ぎた主体主義）」、「言語活動に傾倒した体育授業（運動量の減少）」、「仲間づくりとしての体育（体育の道徳化）」などという形で、これまでも問題視されてきていると述べており、とりわけ学習内容の追究に対する問題点を指摘している。その上で、「どのように学ぶのか」という方法論で先行されていた議論が、「何を学ぶのか、学びとは何か」という学びの内容論や本質論へと推移している、と述べているものの、それは、議論の場にとどまっており、新学習指導要領実施に向けて、これまでの体育授業実践で「何をどれくらい学ばせることができたのか」について評価が行われているとは思われない。子どもたちに学ばせようとして取り出した学習内容は適切だったのか、その学習内容について子どもたちは何をどれくらい学べたのかということについての検討が不十分と考えられる。

生涯スポーツ社会の実現を目指すものであるものの、体育科はその基礎を培う役割を担っているのである。教科である以上、運動との多様な関わりを生み出すような学習を展開させていく中で何を教え学ばせることができたのかという部分にまずはその価値を見出す必要があると考えられる。その結果として、運動やスポーツを好きにさせることや体力を向上させたことによりにどのように影響を与えたのかということを検討していくことが必要と考えられる。

本来、活動の仕方等の指導の方法は、「何を教えるのか」の内容を拠り所にして検討されなければならない。これまで方法論が推進され、「どう教えるか」については追究され広まってきたように思えるが、学びの内容論つまり「何を教えるか」は曖昧なままで十分な追究がされていないのは、学習内容を追究していく以前に、その捉え方や考え方に共通理解が図られていない現状があることもひとつの要因であると考えられる。今後、子どもにどのように活動させるのかの方法を検討することに先行して、「何を教えるのか」の学習内容を追究することへの意識を高めていくためには、授業の実施者である教師の学習内容に対する意識を変化させていく必要がある。このことへの意識の改革に取り組んでいかなければ、学習指導要領が改訂されるたびに方法論から内容論へ、の議論だけがくり返されることになってしまうことが危惧される。

そこで本稿では、小学校の体育科における授業実践に関わって、学習内容に対する追究の不十分さの現状を整理するとともに、小学校教師の体育科の学習内容の考え方（認識）の実態を把握しようとした。その上で、運動種目そのものに内在する運動の仕組みや構造を学ぶという立場から体育科の学習内容の考え方を整理し、その内容を小学校教師へ提示することでその受け止め方を捉え、学習内容の追究に関する課題を見出そうとした。

## 2. 体育科の授業実践における現行学習指導要領の評価

新たに告示された小学校学習指導要領解説体育編（平成 29 年 7 月）では、各学校においては、育成を目指す資質・能力の系統を踏まえ、「何を教えるのか」とともに「どのように指導するのか」を整理し、学習を進めることを求めている。とするならば、現行の学習指導要領における授業実践の積み重ねによって、何をどれくらい教える（学ばせる）ことができたのかの振り返りがされてこそ評価となり、その成果と課題にもとづいて新しい学習指導要領における追究の視点が示されなければならないと考えられる。

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）で出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等」では、現行の学習指導要領の成果と課題が提示されている。

- 体育科、保健体育科については、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、体育と保健との一層の関連や発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図りつつ、指導と評価の充実を進めてきた。
- その中で、運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力の低下傾向に歯止めが掛かったこと、「する、みる、支える」のスポーツとの多様な関わりの必要性や公正、健康・安全等、態度の内容が身に付いていること、子供たちの健康の大切さへの認識や健康・安全に関する基礎的な内容が身に付いていることなど、一定の成果が見られる。
- 他方で、習得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること、運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること、子供の体力について、低下傾向には歯止めが掛かっているものの、体力水準が高かった昭和 60 年ごろと比較すると、依然として低い状況が見られることなどの指摘がある。また、健康課題を発見し、主体的に課題解決に取り組む学習が不十分であり、社会の変化に伴う新たな健康課題に対応した教育が必要との指摘がある。

このように示された成果と課題の内容を見ると、体育の授業実践において何をどれだけ教える（学ばせる）ことができたのかという観点からの振り返りは見られない。運動やスポーツが好きになることや体力が高まることは、体育の授業が大きな要因のひとつの要素となるとは考えられるが、その他の様々な要因が関連した結果としての成果と課題であり、単純に体育科における学習指導要領に対する成果と課題としてしまってよいかは疑問である。体育の授業実践でこのようなことが学べたから運動やスポーツが好きになることに成果があった、あるいは体力を高めることに影響を与えたというようなことが示されなければ、本当の学習指導要領の成果と課題とは言えないのではないかと考えられる。

そもそも現行の小学校学習指導要領解説体育編（平成 20 年 8 月）に、各学校においては、身に付けさせたい内容に向けて「何を教える必要があるのか」を整理し、学習を進めることが求められる、と示されているわけなので、新しい学習指導要領では、その部分の成果を捉えるとともに課題を整理し、新たな追究の視点が示されなければならないはずである。

その他に学習指導要領に関する成果と課題について具体的に述べられているものは見られな

い。例えば、新しい学習指導要領での授業実践に向けて出版されている解説書等を概観してみても、中央教育審議会答申で示されたものを引用しているものばかりで、「何を教えるのか」についての成果と課題を示そうとしたものは見られない。

新しい小学校学習指導要領解説体育編では、「何を教えるのか」とともに「どのように指導するのか」を整理することが示されることとなっている。「何を教えるのか」を追究して、その内容を運動することや活動することの中に埋もれさせないで明確に取り出すことを求めていけば、「どのように指導するのか」の検討は明確な目的に向けてのものとなり、手立て等の方法だけが先行することはないものと考えられる。

しかしながら、「何を教えるのか」について、現行学習指導要領における体育授業実践について具体的な振り返りがされない現状においては、その視点が曖昧にされたまま「どのように指導するのか」が検討の中心になってひとり歩きし、とどのつまり、その種目をどのように教えるのかとなってしまうことが心配される。新しい学習指導要領では、指導する内容の整理はされているものの、体育授業の方向性や性格を左右する中核の部分になるとされる「何を教えるのか」の追究がかなり学校現場まかせになっているような印象を拭えない。

### 3. S 県の研究集会における授業実践報告（体育科）の研究内容

表1は、平成30年度に開催されたS県の研究集会で報告された体育部会の実践報告の各研究テーマと研究内容をまとめたものである。

研究内容の項目とその具体的な内容を概観すると、手立て等の方法に関するものがほとんどで、何を教えるかの学習内容を適切に取り出す（設定する）ことについて追究している実践報告は見られなかった。また、実践した結果として、技能の伸びや体育授業への愛好的態度の高まりを検証した報告は見られるものの、教えようとしたことは適切だったのか、教えようとしたことについて何をどれだけ教える（学ばせる）ことができたのかについて検証しているものは見られなかった。学習内容という捉えとして、いくつかの観点において設定をしているかもしれないが、運動することや活動することの中に埋もれてしまっている様子が見られた。そのため、手立て等の方法に関する視点が目立ち、扱う種目をどのように行わせていくのかという考え方をイメージさせるものであった。

このことに関連して、大貫（2018）は、「運動種目＝教材＝学習内容」という考え方が根強くあり、小学校学習指導要領解説体育編（平成29年7月）においても、この運動種目を教えるという考え方は踏襲されていると述べている。体育科は、実技を伴う教科であるがゆえに、種目そのものが授業の目的となってしまう実態が表されていると考えられる。そこで、次項では、「運動種目＝教材＝学習内容」という考え方について検討しようと思う。

### 4. 小学校教師の体育科の授業実践における「運動種目＝教材＝学習内容」の考え方の実態

大貫（2018）の言う「運動種目＝教材＝学習内容」の考え方とはどのようなものなのだろうか。本来、教科としての体育科の学びは、それぞれの領域の各種目を使って、運動についての学習を行っていくことと考えるとするならば、「運動種目＝教材＝学習内容」という考え方は、その運動種目をどのように教えようかという考え方と捉えられよう。

岩田（1994）は、「教材」とは、学習内容を習得するための手段であり、その学習内容の習得をめぐる教授＝学習活動の直接的な対象になるものである、と示しながら、従来、体育授業に

表 1 S 県研究集会の実践報告（体育科）における研究テーマと研究内容例

研究テーマ	研究内容
運動の特性に応じた単元を貫く課題設定により、運動の楽しさを感じながら学び続ける子の育成をめざして	<ul style="list-style-type: none"> <li>○課題解決に向けて技能を向上させるための工夫</li> <li>・トレーニングタイムの工夫</li> <li>・段階的な指導の工夫</li> <li>・学習カードの活用</li> <li>○課題解決に向けて思考・判断させる力を高めるための工夫</li> <li>・ペアチームによる観察</li> <li>・視点を明確にした作戦会議</li> <li>・動きを言語化するための振り返りカード</li> </ul>
運動する楽しさを味わい仲間と共に主体的に課題解決に取り組む子どもを育てる体育授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間との関わり合いを積極的に取り入れる</li> <li>・子どもの思いを大切に</li> <li>・運動の場づくりやルール等を工夫する</li> <li>・ICT機器を効果的に活用する</li> <li>・仲間と共に自らの動きを振り返る</li> <li>・課題解決に向けて思考する場を設ける</li> </ul>
すべての子どもが主体的に学ぶ体育科の授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意欲的に取り組める教材、ルールの工夫</li> <li>・児童と教員でともに考える学習課題の設定</li> <li>・ICT機器の活用により、課題の発見や動きのポイントを視覚化、焦点化する</li> </ul>
運動の楽しさや喜びを味わい、主体的・対話的に活動できる体育科学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自らの課題を克服するための基礎ドリル</li> <li>・仲間を励ますプラスの言葉かけ</li> <li>・ラリーを続けるためのルールの工夫</li> <li>・単元の成果を振り返る学習カードの工夫</li> </ul>
楽しさを実感しながら運動技能の確実な習得と体力の向上を目指す体育の授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育の授業に対する姿勢を前向きにする学習活動の工夫</li> <li>・運動技能の定着や体力の維持を図る教材教具の工夫</li> </ul>
関わり合いの中で、自分と仲間の「できた」を実感する体育の授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入時の準備運動の工夫</li> <li>・子どもたちの課題に合った多様な場の設定</li> <li>・学習カードの活用</li> <li>・ペアやグループでの関わり合いの時間の設定</li> </ul>
対話によって運動技能が向上する授業づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・種目に応じて技能の向上が図れる視点を与える</li> <li>・視点に応じて対話を行う場面を設定する</li> <li>・課題が解決できるような練習の場を設定する</li> </ul>
体育における、発達段階に応じた関わり合い活動の充実をめざして	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えを伝え合う人数、話し合いのタイミング、ワークシートなどの話し合いの手立ての工夫</li> </ul>

もち込まれるスポーツ種目や運動の技を教材として認識してきた歴史があることについて次のように述べている。

バレーボールや走り幅跳び、前方倒立回転などといったレベルにおいてであり、現在でもその傾向は根強く残っているとよい。国語や音楽などの教科において、その学習対象となる文学や音楽作品が一つのまとまりや輪郭を有していることから、即時的な教材と呼ばれる傾向があるのとほぼ同様に、体育におけるスポーツ種目などもそのように理解されてきた。

また、1981年刊行の「新版・現代学校体育大事典」（大修館書店）では、「教材」とは、「教育の立場から選ばれた運動文化としての運動種目のこと」として説明されている。このような背景が、「運動種目＝教材＝学習内容」という考え方を形作ってきたことの要因のひとつと考えられる。

運動種目をどのように教えるのかというのは、言い換えれば、運動種目を授業の目的としているということである。そのような考え方で学ばせたいことを設定するならば、その種目をどのように行うのかのやり方に視点が向くと考えられる。必然的に、その種目をできるようにしていくことが中核となり、子どもたちに教え学ばせたいことは、その種目の技能を身に付けることを柱としながら、どうするとよいかを考える（思考する）こと、楽しさを味わうこと、

仲間と関わること等、異なった要素のものが複層的に取り扱われることになることが連想される。

そこで、S 県 S 市の小学校教師 5 名に協力を依頼し、日々実践している体育授業実践の具体的な内容について聞き取り調査をし、「何を教えようと考えているのか」「どのように教えようと考えているのか」という枠組みで整理し、教えたことが複層的に取り扱われることについて検討を試みようとした。

S 県 S 市の小学校教師 5 名（表 2）に承諾をいただき、平成 30 年 7 月下旬～8 月上旬の期間に体育の授業実践に関する聞き取り調査を実施した。

表 2 聞き取り調査をした 5 名の教師

	A 教諭	Y 教諭	O 教諭	T 教諭	K 教諭
性別	男性	男性	女性	男性	男性
年齢	37 歳	32 歳	27 歳	37 歳	35 歳
経験年数	13 年	11 年	4 年	14 年	12 年

対象とした教師に平成 29 年度に実践した体育授業の単元について想起していただき、実践した内容を具体的にお話いただくようにした。なお、聞き取る際には、その内容について具体的にお話いただくようにするとともに、その意図等も問うようにした。

聞き取った授業実践の内容を、体育科の授業構造（後藤ら，2012）の枠組みを参考に「教育内容に関わること」「学習活動に関わること」「教授活動に関わること」をそれぞれ「教えたこと・考えさせたいこと・気付かせたいこと」「児童の活動」「教師の手立て」の 3 つに対応させ整理した。

表 3 は、体育授業実践について聞き取り調査をした教師が子どもに教えたこと・考えさせたいこと・気付かせたいことの内容とその視点を整理したものである。教えたこと・考えさせたいことは、授業における学習させたい内容と深く関連していると捉えるならば、その内容

表 3 子どもに学ばせたいと考えている内容とその観点例

教えた内容・考えさせたい内容	学ばせたいことの視点
基本的な動き	技術
走り方	
守備をする力	
ボールをつなぐ	技術の視点
技のポイント	
チームでの作戦	戦術
ルールに応じた戦術	
次回の目標	目標
上手い/できない理由	課題
チームの課題	
チーム内での役割	役割
体を使ってうごく楽しさ	運動する楽しさ
グループで動く楽しさ	
運動を楽しむこと	
運動の楽しさ	

はいくつかの異なる要素のものが混在していることがうかがわれる。学ばせたい内容として捉えてはいるものの、身に付けることや味わうことなどが複雑に絡み合っており、このようなと

ころに、学習内容とは何なのかの共通理解が図られていない実態が反映されているものと考えられる。

もうひとつ言及しておかなくてはならないのは、学ばせたいことの内容やその視点に扱う種目がどのような種目なのかということを追究するという視点があり見られないことである。概して、体育授業実践では、子どもたちにどのように行くとよいかを考えさせようとする傾向が見られる。そうであるならば、その考えるもと（材料や根拠）になるものがなくてはならない。それは、その種目そのものに内在している部分を追究していくことから得られるものと考えられる。それが学習するということになるのではないだろうか。種目を追究して、例えば運動種目の構造や仕組みなどが抽出されれば、それを根拠にどのようにしていくとよいかの発展的な学習につながっていくものと考えられる。運動種目に内在している価値の部分に対する追究の視点がありみられないということは、子どもたちの活動は、その運動を試しにやってみて、何ができないかうまくいかないかの課題を捉えて、どうしたらよいかを考えて実践しようというものになることは容易に予測される。

協力いただいた教師から聞き取った内容のうち、子どもたちの活動の部分を見てみると、次のような活動とその課題が捉えられた。

- ・ゲームを行ってみて課題を見つける  
→試しのゲームを行うにしても、何を試すのかが不明瞭
- ・課題に合わせて練習場所の選択  
→何に対する課題なのかがあいまいであり、課題の視点が共有されていない
- ・チームごとに作戦を考える  
→何を根拠にして作戦を立てるのか、材料のないまま考えさせようとしている

考えるための材料がない状況下でどのようにしたらうまくできるようになるかを考えて取り組ませようとしているものと捉えられ、運動種目の経験はさせているが、学習という部分では不十分と考えられる。

最後に教師の手立ての内容を見てみると、場の工夫、用具の工夫が多く、加えて助言アドバイスがあげられているが、どうしたらよいかを考えようと子どもにゆだねている部分が多いという印象が強いという結果であった。

以上のことから、「運動種目＝教材＝学習内容」という考え方は、「運動種目をどのように教えるのか」ということを追究する考え方であり、教えたこと（学習内容）はいくつもの異質な要素が混在するものであると考えられ、運動種目を経験させる授業になっている可能性が示唆された。

## 5. 体育科の教科内容と学習過程の検討

### (1) 体育科の学習内容の対象となるもの

前項において、学習内容の考え方には、異質な要素のものが混在しており、複雑に絡み合っていることを捉えた。技能や思考力・判断力などは身に付けさせるものであるし、運動の楽しさや喜びは味わわせるものであることから、学習内容はそれらと関連づけられるが区別して考えなくてはならないことは明らかであろう。学習内容を明確にするということは、運動することや活動することに埋もれさせてしまわないようにすることはもちろんのこと、身に付けさせ

ること等と区別して教え学ばせるものとして取り出す必要があると捉えられよう。

学習指導要領には、指導する内容は明示されているが、それは、指導する内容であって学習内容ではない。指導内容だけをそのまま授業に落とし込むのでは、やはり運動種目を教えるという考え方から脱却することができず、種目の経験をさせる授業にとどまると考えられる。指導する内容を使って学ばせることや指導する内容に含まれる学ばせたい内容を明確にしておくことについて今関（2017）は、知識として学習内容をおさえることを提示している。その内容について、事実・記号・名称・絵・擬音語・原理・原則・概念・考え方等を例示している。

大貫（2018）は、体育では教材としての運動種目を経験させるだけになっていることを指摘し、なぜその運動種目を教えるのかという教科内容がはっきりしなければならないと述べている。そして、教科内容を私人的ではあるが「運動文化の人間的な変革・創造に向けた、運動文化に関する科学の根幹をなす基本的概念や原理としての知識や技術の体系」と考えていることを示している。そして、これまでその基本的概念や原理の追究が不十分なまま現在に至っているとし、体育における内容概念を表す際に使用されてきた「学習内容」という用語が、この教科内容と教材の混同を導く原因となっていることを指摘している。運動種目をどのように教えるのかという考え方では、運動のやり方として学習内容が捉えられるが、運動種目を使って何を教えるのかという考え方だと運動の種目に内在している価値的内容の部分から学習内容が捉えられ追究されていくものと考えられる。

## （2）学習過程の試案的検討

学習内容を、扱う運動種目に内在する基本的概念や原理と捉え、発達段階に応じた内容として設定していくとしたならば、学習過程はどのような仕組みになると考えられるのか、試案的ではあるが検討してみようと思う。

運動種目の基本的概念や原理を学習内容と設定することから、考えるための材料を提供せずに運動をどのように行えばよいかを考えさせるというような学習過程になることは考えにくい。その種目の概念や原理を理解させるための追究活動が展開されるか、または、活動していく中で、概念や原理を学び取ることができるような学習過程が想定される。

陸上運動のリレー種目を例に考えてみることにする。

一般的に多く見受けられる授業として、バトンパスの練習をくり返し行い、リレーを行ってチームのタイムを伸ばすことを目指す。しかしながら、これだとリレーという種目の経験はしたもののリレーという種目を使っての学習という面では不十分であると考えられる。

バトンパスについて学習指導要領には、減速の少ないバトンパスと示されていることから、減速の少ないバトンパスとはどのようなバトンパスなのかを追究することに着目する必要があると考えられる。個人の持ちタイムを合計したタイムよりもリレーのタイムの方が速くなるという、利得タイム創出の原理を学習内容と設定し、なぜ利得タイムが生み出されるのかを追究するという学習が想定されるであろう。利得タイム創出の原理を理解した上で、その実現に取り組ませることになる。体育の学習であることから、正式な距離や人数でのリレーを行う必要はないと考えられ、リレーに必要な最小人数と全力で走りきることのできる距離のリレーで利得タイムの実現に取り組むのである。子どもたちの発達段階に応じた形にして、学習内容に関わる運



動を実現することができるように学習過程を仕組むことが重要と考えられる。そして、利得タイムが実現されれば、減速の少ないバトンプスの仕組みを深く理解することにつながると考えられる。

運動種目ありきではなく、その運動種目が発展してきた中で追究されてきたことを学年の発達段階に応じた形で追究していくことが、体育科の重要な学習になると考えられる。

## 6. 「運動種目を教える」から「運動種目を使って教える」への意識の転換に対する課題

前項で検討した体育科の学習内容の捉え方と学習過程の枠組みについて体育授業実践の聞き取り調査に協力いただいた先生方に提示し、簡易的ではあるがディスカッションを行い、その受け止め方を捉えようとした。

交流する中で出された主な意見は次のようである。

- ・運動種目に内在されている基本的概念や原理を追究することは重要だと思うが、知識理解の理論的な部分が多くなってしまう。
- ・単元によって、基本的概念や原理を追究しやすい種目と追究しにくい種目がある。
- ・小学校の高学年ぐらいだとイメージできるが、低学年や中学年だと難しくなってしまう。
- ・枠にはめて教えることが多くなるようなイメージ。子どもに試行錯誤しながらいろいろ考えさせて、気付かせていくようにさせたい。
- ・やはり、運動することの楽しさやできるようになることの喜びを味わわせることを中心としたい。

意見の交流では、運動種目を行うという固定的な意識を感じるものであった。実技科目といわれる所以がここにあると思われる。しかしながら、教科の立場から捉えるならば本質的には実技を伴って学ぶ科目といった方がふさわしいと考えられる。運動種目を行うことを目的とする意識から運動種目を手段として運動についての学習を生み出すような意識への転換を図っていくことの必要性に対して、2つの課題が考えられた。

まず、運動種目をどのように行うのかと運動種目を使ってどのような学習を生み出すのかという考え方のズレが生まれるのは、体育科の学習内容についての共通理解が図られていないことが要因としてあげられる。そこには、体育科の学習内容を複層的に設定している実状があると考えられる。学習内容は、基本的にはどの子にも共通して学ばせたい内容であることから、共有できるものとして整理していく必要がある。異質な要素のものを混在させることなくそれぞれの要素がどのように関連していくものなのか整理することが必要である。

次に、低学年から高学年へと教え学ばせる内容がどのように積み上がっていくのかを整理することが必要である。系統的な指導が重要であるといわれるものの、運動種目ではなく、学ぶ内容の系統性を整理することが必要である。

## 7. まとめ

本稿では、まず小学校の体育科における授業実践に関わって、学習内容に対する追究の不十

分さの現状を整理しようとした。現行の小学校体育科の学習指導要領についての成果と課題では、「何を教えるのか」の観点からの振り返りがされていないことが確かめられた。また、学校における体育の授業実践研究の研究内容を概観すると、学習内容に対する追究の視点が見られず指導の手立て等の方法に関するものがほとんどであった。

次に、小学校教師の体育科の学習内容の考え方（認識）の実態を把握しようとした。「運動種目＝教材＝学習内容」という考え方は、「運動種目をどのように教えるのか」という考え方であり、複層的に学習内容を設定していることがうかがわれた。

さらに、運動種目そのものに内在する運動の仕組みや構造を学ぶという立場から体育科の学習内容の考え方を整理し授業の構造を試行的に検討した。体育科の学習内容は、知識として取り出すという考え方をとれば、運動文化に関する基本的概念や原理として捉えられた。学習過程で捉えるならば、その運動種目に内在する概念や原理を理解しようとするのが重要な学習となる可能性が考えられた。

そして、試案的に検討した学習内容や学習過程を小学校教師へ提示し、ディスカッションを行う中でその受け止め方を探り、学習内容の追究に関する課題を見出そうとした。学習内容の追究に対して、「運動種目を教える」から「運動種目を使って何を教えるのか」への意識の転換には、学習内容の捉え方の共通認識を図っていくことの必要性が考えられた。

## 参考文献

- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 体育編，東洋館出版社
- 岡野昇・青木眞（2018）「体育における主体的・対話的で深い学びに関する考察」，三重大学教育学部研究紀要 第69巻 教育科学：pp. 259-266
- 文部科学省（2016）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」，中央教育審議会答申：pp. 186-192
- 文部科学省（1998）小学校学習指導要領解説 体育編，東洋館出版社
- 岡出美則・植田誠治（2017）平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理体育，東洋館出版社
- 白旗和也（2017）平成29年版小学校学習指導要領の展開 体育編，明治図書
- 岡出美則（2018）平成29年改定小学校教育課程実践講座 体育，ぎょうせい
- 大貫耕一（2018）「協同・探求の授業づくり」，体育科教育5月号：pp. 62-64
- 岩田靖（2010）「体育の教材・教具論」，新版体育科教育学入門，高橋健夫，岡出美則，友添秀則，岩田靖編著，大修館書店：pp. 54-60
- 新版現代学校体育大事典（1981），松田岩男，宇土雅彦著，大修館書店
- 後藤幸弘（2012）「保健体育授業の構造と機能について」，内容学と架橋する保健体育科教育論，後藤幸弘，上原禎弘編著，晃洋書房：pp. 8-12
- 今関豊一（2017）平成29年改訂中学校教育課程実践講座 保健体育，ぎょうせい
- 大貫耕一（2018）「体育における教科内容の混乱」，体育科教育6月号：pp. 62-64
- 梶山聖香（2018）「運動種目を教える」から「運動種目を使って何を学ばせるのか」へ—小学校体育科における教師の意識調査から—，平成30年度静岡大学教育学部卒業論文